

国土交通政策研究所 第229回政策課題勉強会 概要

高齢者がいきいきと暮らせるまちづくり・住まいのしかけ
～『第三の居場所』と『つながり』から考える～
(公財)ダイヤ高齢社会研究財団 主任研究員 澤岡詩野氏

はじめに

- ・ 社会的に、高齢者の虚弱化が進行するなか、物理的なバリアを取り除くことと同様に、「会いたい」「どこかへ行きたい」という高齢者の思いを重視することに関心が芽生えた。現在は老年学（ジェロントロジー）を専門にしながら「居場所」を研究している。
- ・ 高齢化が顕著で、地域のつながりが地方都市に比べて薄い「都市郊外」における、一人暮らしの後期高齢者に着目。

1. 大衆長寿時代における高齢者にとっての「つながり」

- ・ 人生100年時代において、周囲の支えが薄くなり、個人化した高齢者が増加した「大衆長寿時代」が訪れている。シニアの新しいかたちのいきがいを探す必要が生まれている。
- ・ 孤立ではなく「自立」のためには、セーフティネットとしての人とのつながり（あいさつを交わす程度でも可）が必要。しかし危機意識が希薄で支援を拒む高齢者もあり、外出頻度が週に一回以下にとどまる「閉じこもり」が、70歳以上のうち三割になっている。
- ・ つながりのためには、地域よりも生活圏域としての「地元」が重要。十人十色、本人の生活にとって一番意味のある圏域で、あいさつ程度のゆるやかなつながりでよい。

2. つながりづくりの鍵—プロダクティブとジェネラティビティ

- ・ 「向こう三軒」のような近所付き合いを避ける価値観の傾向があるなど、地域の活動が同調圧力のように感じられ閉じこもりのきっかけにならないよう、本人がつながりたいと思えるつながりの「質」が重要。
- ・ 周囲に自分のできることを「シェア」できる人のほうが健康であるという研究がある。ただし、いわゆる「スーパーカリスマシニア」のような社会参加ではなく、知人や友人を誘う程度の小さな「プロダクティブ（生産的な活動）」に高齢者が参加することが大切。
- ・ すべてを誰かにしてもらおうお客さん扱いが、高齢者にとっては一番辛い。最後まで、ちいさなプロダクティブが続けられる「地元」をつくる。
- ・ 多世代で活動できる居場所や、子どもに関わる活動で、「次世代」へのつながりを生み出す（ジェネラティビティ）視点も有効。

3. すでにあるものを活用する

- ・ 新しい場所や公的施設、イベントを一から作ると、意識の高い人しか来ない。一步踏み出せていない人へアプローチするため、すでにある場所を活かし、発想を転換する。

- ・ 公的な機関が仕掛けた社会参加というだけで引いてしまう高齢者がいる。例えば、喫茶店や商業施設などが、気がついたら「居場所」になっていたと思えるようなしくみ、仲間ができて楽しくなるようなきっかけを仕掛ける。
- ・ 支援されることに対してもハードルがある。まずは「目が向くこと」が必要
- ・ 支援者として参加する場合も、最初から「貢献」や「地域」を意識する必要はない。
- ・ コーディネーターが重要な鍵を握る。

4. 事例：荻窪家族プロジェクト

- ・ 多世代居住で、地域に開放された集合住宅。個人オーナーによる活動。
- ・ オーナーは団塊世代の女性。親世代が受けた社会保障は、自分の時代にはどうなるかわからないという認識のもと、「自分のために」活動を開始した。
- ・ 相続した木賃アパートを建て替える事業計画を立てて資金を集めようとしたものの、多世代向け、低所得者にフォーカスはしないなど、コンセプトがマッチする補助金がなく、結果的に個人としてまとまった金額の融資を地域作りに関心のある金融機関から受け、住宅を建設することができた。
- ・ アトリエ、集会室、ウッドデッキなどがある。また、地域に開放している「百人力サロン」については、不特定多数の出入りする場所には抵抗感があったため、ゆるやかなメンバー制を取る。関係者の紹介があれば参加が可能。
- ・ オーナーを中心に、地域の男性が「番頭さん」として手伝いを提供。高齢の住民も得意な菊の栽培を地域の方々のために教えるなど、地域のひとつの核となりつつある。自分が何かを得て豊かになるだけではなく、少しずつ「プロダクティブ」を提供して、担い手としても参加するようになる。
- ・ 勉強会で地域の人を講師として招く、暮らしの保健室、食堂、子どもたちの寺子屋などを開いている。多様な人々が、ゆるやかに、ふらっと来られる「百人力」のゆるやかなつながりを生み出すというコンセプトで一貫されている。

以上

質疑応答

【Q1】 相互作用的に展開する活動の重要性と、地域の乗り物の必要性について

- 【A1】 ・（行政と住民の相互作用で活動が活性化するという点について）すべて提供するのではなく、自分たちで手がけてもらう部分をどのように地域に合わせるか、余白をいかに作り込むかが、まちづくりに求められると考えている。
- ・虚弱化などが課題になり、十分程度の平地の移動でも困難があれば引きこもりになってしまうことがある。裕福であれば（荻窪の地域開放サロンでは）タクシーで乗り付けたり、家族に車を運転してもらって訪問する人もいる中、「人様のお世話になりたくない」という気持ちも根強く、「気軽にいきたいが交通手段がない」という状況も。気楽さが重要なので、自動運転なども選択肢としてあり得るのでは。
 - ・愛知県豊明市では、銭湯の送迎バスを活用して高齢者の居場所づくりの取り組みも行っている。行政は、高齢者が集まる場所で当該事業者のチラシを配るなどの支援をする。その結果、高齢者の居場所として銭湯が利用されるようになった。住民にとっての公平性を重視し、既存の仕組みに働きかけた結果、新しい動きを作り出すことができた。
 - ・ワンメーターの圏域の人のつながりを維持できること、持続性が重要。

【Q2】 コーディネーターのイメージはどのような人物像か

- 【A2】 ・市民活動支援センターがコーディネート機能を持っていれば、関わることもある。たとえば、ある市では、シルバーセンターの人材が当事者として高齢者の活動に参加し、関係性を作りながら情報提供などをしていく方法を模索している。
- ・日常的に困りごとの相談にのるという意味では、地域に密着している人が「つなぎ手」として動いてもらうことが大切かもしれない。荻窪のプロジェクトでは、公的な資格を持たなくても力を発揮しており、資格や役目の有無は必須とは限らない。

【Q3】 アメリカの高齢者住宅施策の中で、たとえば人件費がかかるコーディネーターの配置のためには、まず効果検証を行っていた。どのように効果を把握するか。また、採算性は。

- 【A3】 ・短期的な効果検証は難しい。1年単位で「自主グループ」を何個作るといった目標を立て実行しても、つながりは評価できないのではないか。ソーシャルキャピタルをどう見るか、5年や10年という目線でいかに評価するかが大切だと思う。
- ・サロンは助成金を受けずに運営している。住宅部分は8割居住で黒字。高齢の方が多いため、入れ替わりは多い。荻窪は新築であったため建設資金が嵩んだが、上手にリノベーションをすればコストは抑えられる。

【Q4】 気軽に、ゆるやかにプロダクティブに参加するための ICT などの活用について

- 【A4】 ・人とのつながりが最も重要なので、そのためのきっかけとして、また気軽にという点では技術の活用はあり得ると思う。